

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語における心理描写
Author(s)	近松, 明彦
Citation	ニダバ , 29 : 127 - 136
Issue Date	2000-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048073
Right	
Relation	



英語における心理描写

近 松 明 彦

0. 序論

本稿は、心理文等、人の内面に関して記述する文の特質を、話し手という概念を用いて考察する。

心理文とは、次のような「人の心理状態を表す文」とされる(神尾(1990: 3・3) :

(1) ぼくは気分が悪い。 (神尾(1990))

(1)は、話し手が自己の内面（ここでは感覚）を表白した日本語の文である。本稿が扱うのは主として英語の心理文であり、特に話し手が他者の内面を洞察する際の言語表現に注目する。

1. 先行研究

話し手、聞き手という語用論的な概念が文法の領域で対応するのは、人称(person)であり、人称はモダリティ(modality)とも関連している。以下この点に関連のある先行研究をまとめておきたい。

Palmer(1986: 6.3.)は、人称とモダリティの関係について論じている。その中で、法と人称に関する制限が一部の言語に見られることを紹介している。更に、Palmer(1986: 6.3.)はイギリス英語などで、shallの用法が人称によって異なることに触れている。¹⁾

このことは、日本語の分野における幾つかの研究(渡辺(1991)、仁田(1991)など)を思い起こさせる。

仁田(1991)では、日本語における人称とモダリティの関連が指摘されている。例えば、同書によると、命令、禁止、依頼にはガ格の名詞句として2人称のみが用いられるという：

(2) { *私 / あなた / *彼 } が行って下さい。 (仁田(1991))

また、意志、希望の文では一定の条件下で、主体を表す名詞句が1人称のみが用いられるという：

(3) { 僕 / *君 / *彼 } は今年こそは頑張ろう。 (仁田(1991))

仁田(1991)は以上の他にもモダリティに関して多数の人称制限の現象を指摘している。

渡辺(1991)においては、「わがこと」「ひとごと」という概念が用いられている。同論考によると、例えば「ずいぶん」は「嬉しい」や「悲しい」と共起しようとせず(「大へ

ん嬉しい」や「ずいぶん厚い」が可能であることと比較)、また、「嬉しい」、「悲しい」などの語は、「『私は』の述語とはなり得ても、『彼は』の述語になり得ない」という。そのような語の分析に際して、「わがこと」という概念が用いられている:

このような、話し手「私」のことを述べることは出来ても、他人「彼」のことを述べることの出来ない語の存在は、周知のことであろうが、それを本稿では「わがこと」性の語と呼ぼうとするのである。(渡辺(1991))

また、渡辺(1991)では、「わがこと」の対立概念が「ひとごと」であり、「話手に関わりなく成立すること」(「要旨」)とされる。例えば、「嬉しい」、「悲しい」などは、「わがこと」性という意義素性を持ち、「ずいぶん」は「ひとごと」性という意義素性を持つという。

次に、神尾(1990)の情報のなわ張り(territory of information)の理論において、話し手、聞き手という概念が直接形、間接形という文形と関連していることについて考えたい。²⁾ 直接形は「確定的な断言の形を取る文形」、間接形は「断言を避けた不確定な文形」とされている(神尾(1990: 2・1))。例えば、「情報が話し手のなわ張りに属するが、聞き手のなわ張りには属さないという状況」(神尾(1990: 2・2))を取り上げてみる。同書によると、そのような状況では、直接形が用いられ、間接形は用いられないという:

(4) a. 私、頭が痛い。

b. ??私、頭が痛いようよ。(神尾(1990))

一方、「情報が話し手のなわ張りの外にあるばかりでなく、聞き手のなわ張りの外にもある場合」(神尾(1990))を考えると、どのようになるか。例えば、同書では、「アラスカの自然がすばらしい」ことを、話し手も聞き手も未体験である場合、次のように間接形を取ると論じられている:

(5) アラスカの自然はすばらしいって。(神尾(1990))

このように話し手、聞き手という概念が文形、文末表現と連動している。³⁾

更に神尾(1990: 3・3)は上で触れた心理文についても考察している。同書では次に引用するように、日本語の心理文は2人称と3人称では不可能とされる:

(6) a. ぼくは気分が悪い。(=(1))

b. * あなた、なんだか怒ってる。

b'. あなた、なんだか怒ってるみたいね。(神尾(1990))

c. * 母は淋しい。

c'. 母はさびしそうだ。

一方、英語ではすべての人称で心理文が可能であるとされていたが、神尾(1990)では次のように人称による容認性の相違が観察されており((6b-c)は「限られた条件の下において

のみ自然である」(神尾(1990: 125))、それらは情報のなわ張り理論によって適切に説明されている：

(7) a. I'm sick.

b. (??) You are very depressed.

c. (??) Jack feels lonely.

(神尾(1990))

本稿は、上のような先行研究を踏まえながら、小説を資料体として心理文などを中心に人(特に他者)の内面を記述する文の諸相を見てゆきたい。

2. 資料

以下の用例は、ジェイムズ(Henry James)の“Daisy Miller”から引用されたものである。“Daisy Miller”は1878年発表の作品であり、本稿が対象とする英語は19世紀後半の英語ということになる。なお、周知の通り、ジェイムズはアメリカ生まれで、のちにイギリスに渡ったという経歴を持っている。

3. 内面の描写

心理文の特質として、主語名詞句の主題役割が典型的に経験者(experiencer)であることを挙げることができる：

(8) *Winterbourne* was much amused.

(9) *Winterbourne* felt vague emulations.

(8)、(9)の例はにおいて *Winterbourne* という主語は経験者の役割を持つ。

次に、(8)、(9)は文形に関しては直接形である。小説の中からの引用であるため、*Winterbourne* が作家の分身として機能しており、両者の間に同一化(identification)が作用している。

ここで、文体論的な点に言及しておく。資料体としてジェイムズの作品を用いているが、この作家の特色として「視点」の技法を挙げることができる。

十九世紀までの伝統的な小説では、作者はいわば神の座にあって作中人物の言動、心理のすべてを知り、これを読者に解説したのであった。ジェイムズはこの神の立場を放棄し、作中人物の一人の意識を通して小説世界を構築した最初の作者である。

(行方(1982))

以上のような文学上の特色が言語表現に影響していると考えられることもできよう。⁴⁾

それに対し、次の(10a-b)は一続きの発話であるが、(10b)では断言を避けた形が用いられている：

(10) a. There was an English lady we met in the cars -- I think her name was Miss Featherstone; ...

b. ... *perhaps* you know her.

(10b)では、聞き手の知識を話し手が外部から推測していて、断言を避けている。(10b)は容認可能な文であるが、断言を避けているという点については、上の(7b)が容認不可能であるのと同じ要因が影響しており、情報のなわ張り理論等、従来の説によって説明がつくものと思われる。そして、言い換えれば、「他者の内面は外部からは直接知ることができない」という事情が背景にあるのだと言うこともできるであろう。⁵⁾

4. seem について

他者の内面を描写するときに断定を避けるため、次のように *seem* などを用いることがある：

(11) *But to this point Randolph seemed perfectly indifferent; . . .*

「無関心である」(*indifferent*)というのは *Randolph* の心的態度であり、(11)は *Randolph* の内面の記述である。しかし、その内面の様子は書き手の推測の域を出ない。そのため、断言を避けて *seemed* を用いているものと思われる。

ここで、「無関心である」という書き手の推測は、どのような根拠によるのであろうか。原典のテキストを見ると、(11)の文の先行文脈において *Randolph* は姉から会話の聞き手の人物の名前を聞くように命じられている。一方、後続の文脈では、*Randolph* が自分の家族のことを話し続けた話が出てくる。即ち、一連の会話の中で、*Randolph* が姉の命令を無視しているということになる。そのような状況から *Randolph* のことを「無関心である」(*indifferent*)と評しているのである。自己の外部で進行している会話という出来事を根拠に判断を下しているという意味で、書き手の判断は客観的（ないし行動的主義的）である。ここで、(11)の *Randolph* の内面を外部から眺めることによって判断していることを明示しているのが、*seem(ed)*である。

5. 外的描写

ところで、*seem* 「…のように見える」と類似した表現に *look like* 「…のように見える」がある。次に例を挙げよう：

(12) *... neat German waiters who look like secretaries of legation . . .*

(12)の「公使館の書記官のように見える」という場合の *look* は *seem* のような断定を避けるためのものではなく、比喩であることを示したり、外見について述べるのに用いられる表現である。このように、(11)の *seem(ed)*と(12)の *look like* は異なる。しかし、両者に外見を示すという意味的類似性が感じられることも否定し得ない。

(12)のような外見を描写する場合を外的描写と呼ぶことにしよう。話し手（書き手）が自己の外部から受け取った情報をもとに、自己の外部の情景、様子を描写したものが外的描写ということになろう。一方、自己の外部からの情報によらず、自己の内部で完結する精神の活動を表現したものを内面描写と呼んでみる。そうすると、(11)は本来は内面の描写であるものを他者に関する事として外的描写の形で表現したものであると言えるであろう。

ここで、外的描写と内面の描写を対比するために、何かを見ることに関する表現を取り

上げたい。look には(12)のように主題(theme)の主語を伴う用法（「見える」）の他に look at のように動作主要素の強い主語を伴う用法（「（を）見る」）がある。look (at)は、同様に、見ることを表す see と比べると、行為、動作の性質が強い。一方、see は知覚動詞であり、行為よりも精神活動に近い意味的性質を持つ。次の例について考えてみたい：

(13) Winterbourne *looked along the path and saw a beautiful young lady advancing.*

(13)の前半の *looked* は目を向ける行動を取ったことを示すのに対し、後半の *saw* は知覚動詞であり、美しい若い女性が近づいてくるという視覚情報を得たことを示す。(13)の前半 (and の前) の *looked* の主語が動作主であるのに対し、後半 (and の後) の *saw* の主語 (gap になっていて前半の主語と共通) はある程度経験者的であると言える。(13)の文の前半は外的描写であり、後半はある程度まで内面の描写である。⁶⁾

本節で外的描写という考え方を提案したことによって、seem(ed)を用いる前節の(11)が内面的描写を外的描写の形で扱っているという見方が可能になる。

6. 内面描写と外的描写の境界事例

上では内面描写と外的描写の関係を論じたが、両者を明確に区別することは実際には簡単なことではない。次の例を考えたい ((14a-b)は一続きの文であるが、前半と後半を対比するために敢えて a と b に分割している)：

(14) a. The young lady gave no heed to this circumstance, ...

b. ... but looked straight at her brother.

(14a)では、gave no heed to 「～に注意を払わなかった」によって無関心を示している。この無関心は、心的態度ないし、心的過程を表し、他者の内面を描写するという性質を持つ。一方、(14b)では、looked straight at 「～をまっすぐに見た」によって、見ることを外的描写の形で表現している。(14a)の内面の描写と(14b)の外的描写は対比された形になっている。

しかし、(14a)の無関心は、完全に内面的なものであると言い切ることはできない。まず、(14a)には直接形が用いられており、他者について断言していることになる。また、(14a)には(14b)の外的描写の look (at) が後続する。(14b)の but は(14a)の否定文に続くため逆説でなく、(14)の 2 つの節は対比的でない。とすれば、(14)の 2 つの節は一貫して外的描写である可能性が高い。つまり、(14a)は他者の内面であるが、外部から接近可能な透明性の比較的高い状態を表しているようである。原典を見ると、(14)の文に先立って、The young lady は弟から話し掛けられていたことがわかる。そして、(14)の後でこの女性は “Well, I guess you’d better be quiet.” と言っている。即ち、姉が弟の発言を無視しているのである。このように外部の会話を理解することから(14a)が導かれる。

それではなぜ(14a)は間接形でなく、断言の形を取っているのか。この点では、同じく無関心を表現している先の(11)の例文（次に(15)として再録）が seem(ed)を伴っているのと対照を成している：

(15) But to this point Randolph seemed perfectly indifferent

3 節で既に見た通り、小説特有の文体ということも考慮すべきであるかもしれない。また、英語の心理文について、2つの見方があることにも注意すべきであろう。神尾(1990: 3・3)は、英語ではどの人称でも心理文が可能だという従来の説を紹介した上で、それが誤りであることを示し、情報のなわ張り理論による説明を行っている。英語ですべての人称で心理文が可能であるという立場に立てば、上の(14a)が直接形の3人称心理文(あるいはそれに近いもの)でありながら断言の形を取っていても問題はない。また、英語で2人称、3人称の直接形心理文が不可能であるとすれば、(14a)は、純然たる心理文というよりは行動的な過程を表した文としての性質を持つのではないかと筆者は考えている。7

7. 属性描写

内面の描写と外的描写の境界的なケースに関連して触れておかねばならないのは、属性描写の文である。筆者がここで属性描写文と呼ぶタイプの文は表面的には心理文と似ている。例えば次の2つの例文を考えてみたい:

(16) She might be cold, she might be austere, she might even be prim;

(17) . . . he seems very smart.

(16)、(17)はいずれも断言を避けた形を取っている。また、内容面では、(16)は人の性格を評した文であり、(17)は人の知力を評価した文である。いずれも、主語名詞句の表す人物の精神活動の特徴を述べているので、心理文と似ている。しかし、心理文とは幾つかの点で異なる。比較のために、先の心理文の例(8)を(18)として再録しよう:

(18) Winterbourne was much amused.

(18)のように心理文の主語の典型的な主題役割は経験者であったが、それに対し、(16)、(17)の属性描写文では、主語の役割は主題である。また、心理文が一時的な状態を表現している((18)の「興じていた」)のに対して、(16)、(17)の属性描写文では人の普段の習慣的、持続的な属性を表しているという解釈が優先されるであろう((16)の冷淡、謹厳、きちんとしているなどの性質、(17)の利口という性質は、仮に一時的なものであるとすれば、特別な条件があるときに限られる。例えば、それらの性質が見せかけのものである場合とか、特に気まぐれである場合など、例外的な状況に限られる)。更に、(16)、(17)の属性描写は幾つかの証拠をもとに書き手が他者(主語の人物)の性質を外部から評したものである。多くの場合、繰り返されるデータからある種の傾向を帰納するのであろう。例えば、(17)であれば、ある少年と会話して、その少年が質問に適切に返答した場合などに、その印象をもとに少年に対して「利口」という評価を与えるのである。属性描写は外部からの評価であり、外的描写の一種ということになる。(16)、(17)のような属性描写は、他者に関することを外部から描写しているため、断言を避けて、間接形になっているのではないかと思われる。

8. 描写される内面の種類

内面の描写を中心に見てきたが、内面と言ってもそこに描かれるのは感覚、感情、意志、そのほか様々なものがある。

8. 1. 感覚

先ず、五感に関する描写がある。次の例などはそれに当たる：

(19) **But his aunt had a headache. . . .**

(19)の文では、叔母の頭痛が描かれている。頭痛は感覚である。他者の感覚は恐らく、叔母自身の告白などによる伝聞ではないかと推定される。また、その時の状況（原典の後続文脈では、叔母が部屋に閉じこもって樟脳をかいでいる）から加減が悪いことが推定されるであろう。

8. 2. 感情

心理文の典型的なものは感情に関するものであろう：

(20) **But Winterbourne had an old attachment for the little capital of Calvinism**

the little capital of Calvinism と言い換えてジュネーブへの愛着を表現している。ここでは、作家が主語の Winterbourne と同一化した書き方をしている。

8. 3. 意志と思考

次の疑問文は、機能的には依頼であるが、相手の意志を確認しているとも言える：

(21) **Will you give me a lump of sugar?**

この文では法助動詞の **will** を用いることで意志の意味を出している。そのため、主語の **you** が経験者でなく、**give** の動作主になっているという特徴がある。次に、(21)は断言ではなく、疑問である。意志に限ったことではないが、聞き手の内面というものは外部から直接知ることができなくても、問答によって確認することができる。

次の(22a-b)は一続きの文であるが、後半の(22b)における **decide** 以下の決意は意志の一種とも言える：

(22)a. **He wondered whether he had gone too far, . . .**

b. **. . . but decided that he must gallantly advance rather than retreat.**

(22)は、会話の中で遠慮した態度を取るべきかどうかについて躊躇や決意を述べたものである。(22b)における意志、決意の内容は **that** 節の形を取っている。また、前半の(22a)においても **wonder** によって表される迷いの内容がやはり **whether** 節で表されている。

8. 4. 埋め込み文

描かれる内面は、意志や迷いなど思考的な要素が強まると命題の形を取り、文法的には補文構造の形を取る。(22)の2つの動詞 **wonder(ed)** と **decide(d)** はいずれも心的活動を意味する述部に用いられる。そのため、(22)は心理文に近い性質を持つ。しかし、補文構造を取るという点で、典型的な心理文とは区別される。

誰の内面を描いているかという点に関しては、(22)の2つの動詞は(22a)冒頭の **He** を共有しているのだから、書き手は他者の内面を描いていることになる。他者が他者自身の思

考（内面）を告白している。しかし、その告白は 1 人称ではなく、3 人称である。小説に多い文体であるが、作家が登場人物と同一化して告白を行っていることになる。

比較のために、話し手が自己の思考内容を直接伝えているケース（1 人称の例文）を示しておくことにする：

(23) I don't think too much sugar good for little boys.

(24) I imagine that's your fault, not hers.

(23)、(24)は話し手が自己の思考を 1 人称で始まる文としてそのまま述べたものである。一方、上の 3 人称の例文(22)は、思考の告白を外部から（書き手／話し手を通して）他者の内面として描いているという特徴がある。

(22)と同じことが、want を用いた意向、希望の文にも当てはまる。次の例を考えてみる：

(25) She wanted to know why I didn't give Randolph lessons--give him 'instruction,'
she called it.

(25)では、to know の意味上の主語（補文主語）が主節の主語(she)と同一で空所になっている。ある人物が自己の意向、希望を告白することが可能な状況であったかも知れないが、その人物に代わって(25)の話し手が外部から 3 人称の形でこれを代行している。

次に更に複雑なケースを挙げておくことにする：

(26) He was ceasing to be in doubt, for he had begun to perceive that she was really
not in the least embarrassed.

(26)では内面の描写が言わば多層化しているとも言える。(26)後半 (for 以下) の that 節の主語は she であり、主節の主語は he である。後半の主節の述語は(had begun to) perceive であり、知覚を意味する。she で表される女性の内面（「少しも当惑していなかった」）を、he で表される男性が外部から推し量っているのである。ここで、he によって表されている男性は 1 人称で告白しているのでないことに注意したい。作家が 3 人称を用いて描写している。作家がこの男性の知覚を推測している。あるいは、この男性が作家の分身のような役割を果たしている。言わば、内面の描写が重層的に埋め込まれている。

9. 結び

本稿では、モダリティと人称選択が関連していることに注目して、英語の心理文の諸々の側面を分析し、解釈してきた。その際、外的描写と内面描写の区別を提案した。また、比較のために、属性描写文の特質も見た。最後に内面描写の内容の幾つかを概観した。描写される内容として、感覚の描写、感情の描写、意志と思考の描写を取り上げた。思考の描写に関連して埋め込み構造に触れ、内面描写の多層化の現象を紹介した。

話し相手の気持ち等を推し量ることは、会話において重要な役割を果たす。その意味で、心理文や、モダリティと人称の関係は更に詳細に考察すべきテーマであるとも言えるかも知れない。

* (Psychological Description in English)

本稿をまとめるに当たりお世話になった多くの方々に感謝申し上げます。

注

- 1) 周知の通り、1 人称以外が約束、保証など、**commitment** を表し、1 人称が単純未来表す。
- 2) 神尾(1990: 2・2)の説は次のような仮定に基づいている：
(i) 話し手または聞き手と文の表す情報との間に一次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は<近>および<遠>の2つの目盛りによって測定される。
(神尾(1990: 2・2))
情報のなわ張りは次のように定義される：
(ii) <Xの情報のなわ張り>とは、(14) (= (i)——引用者) によりXに<近>とされる情報の集合である。ここで、Xは話し手または聞き手とする。
(神尾(1990:2・2))
- 3) 神尾(1990: 2・3)では、情報のなわ張り理論が英語にも適用されている。「情報が話し手のなわ張りに属するが、聞き手のなわ張りには属さないという状況」(ibid.)には、直接形が用いられるという(ibid.)：
(i) I first met Susan ten years ago. (ibid.)
「情報が話し手のなわ張りの外にあるばかりでなく、聞き手のなわ張りの外にもある場合」(ibid.)については、例えば、次の(ii)のように間接形が用いられるという(ibid.)：
(ii) I hear winter in Quebec is hard. (ibid.)
(ii)はケベックの冬の厳しさを体験したことのない人たちの間の会話の一部と考えられる。
- 4) 神尾(1990: 124)に、報告文体、非報告文体など、文体に関連した議論がある。日本語でも小説などでは2 人称、3 人称の心理文が可能である。
- 5) ここに述べられた事情は、独我論(solipsism)と関連があるということもできよう。
- 6) 例文(13)後半が内面の描写になっているということは、**saw** に続く名詞句である **a beautiful young lady** に **beautiful** という感性を示す修飾語が用いられていることから傍証されるかもしれない。

7) 例文(14a)の方が行動的な過程を表しており、(15)の方がより心的な過程を表しているのではないかということが考えられる。(15)の *indifferent* は叙述的(predicative)である。それに対し、(14a)において同様に無関心を表現している *give heed to* という熟語には、*give* という動詞が見出される。*give* は文字どおりには動作主が制御し得る動的な行為について用いる。このようなことも(14a)が直接形になっていることに関係しているかもしれない。

用例出典

James, Henry. *Daisy Miller and Other Stories*. Ed. Jean Gooder. Oxford: Oxford University Press, 1985.

参考文献

Chomsky, Noam 1957 *Syntactic Structures*. The Hague, Mouton.

Chomsky, Noam 1995 *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts, The MIT Press.

Palmer, Frank Robert 1986 *Mood and Modality*. Cambridge, Cambridge University Press.

神尾昭雄 1990 『情報のなわ張り理論』 大修館書店

行方昭夫 1982 「ヘンリー・ジェイムズを読む」 大橋吉之輔(編) 『アメリカ文学読本』: 109-126. 有斐閣

仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房

渡辺実 1991 「『わがこと・ひとごと』の観点と文法論」 『国語学』 165 集: 1-14.